入選

川と共に未来へ進む

青森県　弘前市立東目屋中学校
三年　西沢　彩音

『清水流』

私の通う中学校の住所の字（あざ）です。『シミズナガレ』と読みます。心の汚れや疲れが洗われるような響きがあります。その言霊のせいか私たちは平穏に学校生活を送っています。地名の通り、私の中学校の近くには、白神山地を源流とし津軽平野を貫く岩木川が流れています。中学校にはりんご農園があり、私たちは農園で作業をするとき、岩木川に架かる橋の上を歩きます。私はときどき、岩木川のとうとうとした水量を見て、心地よい川の音を聞いて、この豊かな水がなかったらどうなるのか、不安になることがありました。

ある日、家に帰ってから父に、

「岩木川は昔どうだった。」

と聞きました。

突飛な私の質問に、父は少し驚きながら、

「昔は下水道の整備がされていなかった。生活排水はそのまま川に垂れ流した。そのせいで下流は水がきたなかった。」

と気まずそうに言いました。

私の住む地域は、比較的、岩木川の上流にあります。しかも、以前までは弘前市の飛び地だったので、下水道の整備が遅かったのです。それをいいことに、生活排水を垂れ流していたのでしょう。

私は小学生のころ、父と一緒に川に遊びに行ったことがあります。そのときの記憶は曖昧ですが、今思うと『清水流』の言葉通り、澄んでいたと思います。鼻を通り抜けるひんやりして透明感のあるにおい、手を入れてみたくなるような親しみがよみがえります。つまり、岩木川の上流に住んでいたので、川の汚れが目立たなかったのでしょう。そして、私が小学生のころはすでに下水道が整備され生活排水を垂れ流す人もいなかったのでしょう。

父は農業を営んでいるので、次に農業と水の関係について聞きました。

「農業をするには水は不可欠で、雨が降らず水が不足すれば用水路に水がいかないので、田んぼ全体に水が行き渡らない。そうなると稲が枯れるので困る。」

と厳しい表情で言いました。

さらに、実際、水が不足して苦労したことについて聞きました。

「干ばつで水が不足する。そのとき、番水制と呼ばれるもので水を確保する。その番水制でけんかになることもあるから大変だ。」

と教えてくれました。その他にも、田んぼを作るために江戸時代から用水路を造っていたこと。それを今でも使っていること。冬に水をもっと確保するために新しいダムを造っていることなど、さまざまなことを教えてくれました。

新しいダムというのは『津軽ダム』のことで、高さが１００m近くもあり、流域の洪水や水不足の不安を和らげ、農業・工業・水道用水を増やし、また、発電の役割を果たすために建設されているそうです。それはすばらしい事業ですが、一方で、私の住む地域からそう遠くない集落がダムの底に水没してしまいました。水を当たり前のように使い、快適な生活をするために、動植物・自然環境・山間の過疎の集落が犠牲を払っていることを忘れてはいけないのです。きっと、地球上のあらゆるところで、こうした問題が起きているはずです。

中学校の校歌に、

『朝夕庭を廻（めぐ）り行く　明（さやけ）き流れ岩木川…』

という歌詞があります。

この歌詞と『清水流』という地名が、これからもずっと替えられることがないように、私はこれから、身近な故郷の自然をもっと想い、大切にし、ブナの森や日本海にまで視野を広げて岩木川の未来のことを考えていきます。

入選

初めて気付いた〝水とは何か〟

宮城県　石巻市立河南西中学校
三年　阿部　美樹

三月十一日、東日本大震災が起きた。私の家は津波の被害が無かったものの、しばらくの間ライフラインが止まった。私はその時、ガスよりも電気よりも水が出ないことのほうが何よりも困った。

私たちの生活で水は、トイレ、お風呂、料理、食器洗いなどのさまざまなものに使われる。それらは、普通に水が蛇口をひねれば出てくるから、容易にすますことができるのだと思う。でも私は、震災で蛇口をひねって水が出てくることが、どれだけ楽なことなのか、そしてどれだけ幸せなことなのか、初めて知った。

断水になったが、私の家ではお風呂に水を貯めていた。父は災害時のために、他にも外の大きなバケツに水を貯めていたり、ペットボトルの水をたくさん買ったりしていた。それのおかげで、だいぶ助かった。しかし、断水は長かったため、その水だけでは足りなくなった。母の実家には井戸があって、その水をもらいに行ったり、自転車で給水所まで行ってもらったりした。二日置きくらいに実家に水をもらいに行った。井戸の水をくむためには、ひもでくくったバケツを井戸の中に下ろして竹の棒でつっつく。そうするとバケツの中に水が入る。そこまでは簡単なのだがここからが大変で、バケツの中の水をこぼさないように水平にして、それを引き上げる。私はその作業を一度だけやってみた。しかし、私の力では水をこぼさずに引き上げることはできなかった。それほど大変な仕事をしてでも、水を手に入れたかった。きっとそれは、皆同じだろう。なぜなら、水がないと私たちは生活できない、いや生きていけないからである。井戸の水は、少し濁っていたり、ゴミが沈殿していたりした。それでもその水をこして、しゃ沸して米を炊くのにも使ったし、料理を作るのにも使った。それらのことは、今の私たちの生活では考えられないことだろう。その頃は、生きることで精一杯だった。あのきつい井戸の水くみをほとんど毎日してでも、一日を水の確保に費やしてでも、私たちには水が必要だった。だから、その水が多少汚くても飲んだ。

私はこの震災前から、「水は大切」ということは、テレビや本、親などから見聞きしていたし、それは常識の範囲内だった。しかし水がなぜ大切なのか、どれほど必要なものなのか、私は分かっているつもりで、全く分かっていなかった。それを私はこの震災で気付くことができた。だから私が経験したことをこれから生まれてくる人たち、ほかの地域の人たちに伝えたい。その教訓をみんなの生活に活かさなければならないと思う。

例えば、先に述べたことだが、お風呂のお湯を次の日お風呂そうじをする直前まで、貯めておくという方法がある。もし、何か震災があった時など、家に全く水が無いより少しでもあったほうが、本当に役に立つ。災害時以外のことに関しても、私たちの生活では、水を使いすぎていると思う。例えば、油汚れなどがひどい食器を、洗う前にふき取ったり、洗濯する時に比較的汚れていないものは洗剤を使わずに洗い、すすぎの回数を減らしたりなど簡単なことで良いと思う。そういう自分ができる範囲のことをして、使う水の量を少しずつ減らしたいと思う。

「水を大切にする。」

口で言うのは簡単なことだが、実践すること、続けていくことは大変なことである。しかし一人一人がそれらをしっかり行えば、きっとより良い未来が待っているだろう。

入選

私たちの使命

福島県　須賀川市立西袋中学校
三年　星　愛衣

命を支える水という言葉をよく耳にする。何気なく聞いていた言葉なのだが、私たちは東日本大震災で、それを実感することとなった。水が思うように手に入らない生活の不便さは想像を絶するものがあった。私たちの生活が、いかに水に依存しているか。失ってしか分からない貴重な体験であったと、あの時のことを振り返って実感している。飲料水はもとより、洗濯、お風呂など私たちの生活は、水に依存している。日本は豊かな水の国だと言われ続けてきた。山の多い地形から豊かな清流が大地を潤してきた。福島県は、源流の県として豊かな水量と清流が他県をも潤す役目を担っている。それは、とても大切なことなのである。福島が水を大切にする役目を持ち続けることができなければ、その水に依存している多くの県の人々に多大な影響を与えることになる。そう考えると私たちに課された責任は、限りなく大きいのである。水は単に降水量だけに影響されるものではない。その水を保持し、浄化するのは自然のサイクルである。森があり、清流があり、湖がある。福島には、その全てが揃っている。だからこそ、今まで源流の県としての役割を担うことができていたのだ。雨や雪として大地に落ちた水は、森に何層にも重なった自然の浄化装置によって清流として、里に流れる。清流は更に豊かに水を集め生命を育む。そのようにして育ってきた豊かな自然が私たちのふるさと福島であった。しかし、そのサイクルが崩れつつある。人の生活を支えるために手を入れられてきた森は、林業に携わる人々が減少し荒れている。開発の名の下に伐採された森は、保水能力を失い浄化能力さえ失いつつある。「春の小川はサラサラゆくよ」と唱歌に歌われた小川はコンクリートで固められ、生命を育むことができない。それら全てが悪いのではないと思うが、考え直さなくてはならない時が近づいている。更に、追い打ちをかけるように起こった大震災による福島原子力発電所の事故。これにより大地や大気、地下水や海洋は大きく汚染されることになってしまった。私たちの美しいふるさと福島はどうなってしまうのか。かつて経験したことのない災害のため、誰にも予想ができない。表面上は何も変わらない。緑は豊かであり、清流は大地を潤し、湖は満々と水を蓄えている。だが以前とは確実に何かが違っている。目には見えない悪魔たちがふるさとを覆い尽くしているのだ。だから、事態は一層深刻だと言えるのではないだろうか。何も変わらないように見えても全てが変わっている。私にできることは何なのか。途方に暮れるばかりである。だが、自然の力は偉大である。私たちが考えている以上に大きな治癒力が存在すると信じたいのだ。きっと福島の自然は本当の美しさを取り戻すだろう。私たちには積極的に、その手助けをしていくことが求められている。人間の便利さの追求のために破壊してきた自然を、あるべき姿に戻していくためにも必要なことなのだ。豊かな福島の森は天から降り注いだ水を徐々に浄化してくれるだろう。私たちは微力だけれど、今まで以上に積極的に森に関わって生きていかなければならない。そこから里に流れる清流は徐々に豊かな命を育むだろう。私たちは少しでも、かつての美しい川を取り戻していこう。豊かな実りをもたらす水田を復活させていこう。物質だけが豊かで便利な生活を追い求める時代は、もう終わりにしなくてはいけない。

未曾有の大災害を体験した私たちは、水と人間との大切な関わりを身をもって感じている。だから、せめてこの美しいふるさと、福島に住む私たちは、大地に根を張って、源流の美しい水を守っていく生活を志向することが求められているのではないだろうか。それが、未来を創っていく私たちの使命である。

入選

水の気持ち

栃木県　芳賀町立芳賀中学校
二年　石川　絢菜

私たち人間に怒ったり、喜んだり、悲しんだりする感情があるように水にも気持ちがあるのかもしれない。

水は水道の蛇口をひねればすぐにでてくるとあたりまえのように思っていた。水のない生活なんて考えたこともなかったから、水を出したまま歯をみがいたり、シャワーを出したまま髪を洗ったりしていた。でもある日突然、水のない生活はやってきた。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が日本を襲った。私の住む栃木県は、津波こそなかったものの私の家がある芳賀町は、電気と水が共に止まった。電気は翌日にはもどったが水はまだもどらなかった。お風呂どころか、トイレも流せないので、私と母は井戸水を使っている実家に、家にあったありったけのペットボトルをもって水をもらいにいった。トイレの水を流すためにタンクに水をいれた。だが、二本入れてもうまく流れない。トイレの水を流すのにこんなに水を使うんだ、と驚いた。このとき私は水は怒っているのかもしれないなと思った。水を大切に使うことを忘れかけてしまった私に水の大切さを教えてくれているのかもしれないと。この日から、私の水に対する考えが変わった。水は私たちのかぎりある資源で、きれいな水が使え、そして飲めることに感謝しなければいけないと考えるようになった。そしてボランティアも行った。

野焼きをしたあとの真っ黒な河原を友達と一緒に掃除をした。川の水はきれいに澄んでいて、太陽の光がきらきらと水面に反射して光っていた。それでも草の間には、たくさんのゴミが落ちていた。空き缶やペットボトル、ビニール袋や弁当の入れ物などが落ちていた。拾い終わったあと、水道で手を洗った。その水は、小さいころに、転んでケガをしたときに洗い流してくれた冷たいきれいな水にそっくりの優しいなめらかな水だった。水がありがとうと私に言っているような気がした。

私の心にやきついて消えない写真がある。アフリカのやせこけた子供が涙を流しながら井戸から出た水を全身で受け止めている写真だ。私は一言に水といっても、水には種類があると思う。井戸や水道から出る水、私たちが生きるために必要な水だ。子供が流した涙、人間が悲しみやうれしさなどの自分の感情をあらわす水だ。東日本大震災で家や人々を流していった津波も、茶色くにごった水だった。地球上の生き物はみな、水と共に生きているのだ。

水はときには人々の命をうばい、家や建物を壊す津波となる。だが、雨や川、海、そして飲み水など生き物たちが生きていくうえで大切なものともなる。私たちはたくさん水に助けられて生きている。私たちは水に何ができるだろうか。節水はもちろん、水を汚さないように心がけ、ポイ捨てをしないようにし、そして水が循環しやすい環境をつくる。これが今の私にできる、最低限のことだ。

水は私たち生き物の命の源であり、限りある資源だ。私たちには水を守り、きれいにする義務があると思う。休み時間、水道の前を通りかかると、チョロチョロと細く水が流れていた。私はきゅっと強く栓を止めた。津波も、涙も、雨も、川も、海も、そして飲み水も、意味は違うがすべて水だ。私たちは生まれてから、死ぬまでずっと水と共に生きていくのだ。私が止めた水道から一滴、ポタンと水がしたたる。ほっとするような安心するような、耳に心地よい音だ。水が「ありがとう」といっているような気がした。

入選

心の中まで美しくできる水の力

栃木県　真岡市立真岡東中学校
二年　大塚　悠花

「うわぁ……！」

見わたすかぎりに広がる水田、私のまわりを取り囲むおいしい空気、そして一面に広がる数えきれないほどの小さな光。なんて美しいのだろう。自然とこの景色に心をうばわれてしまう。ここは私の一番好きな場所、ホタルがいて自然があふれた所だ。

私は小学生のころ、生まれて初めてホタルを見た。栃木県の茂木町に住む親せきの家へ泊まりに行った時の事だ。茂木は田んぼや林がたくさんあって、豊かな自然であふれている。中学生になった今でもあの景色は鮮明に記憶に残っている。

「ホタルってきれいでしょう。でもホタルはきれいな水と豊かな自然がないと生きていけないんだよ。」

と親せきの人が教えてくれた。その言葉の意味をよく考えてみると、水がきれいな地域がどれほど少ないかがわかる。水が汚いというだけで死んでしまうホタルの事を考えると、どんどん水や環境を汚してしまう人間はどうなのかと疑問に思う。

私の母が子供のころは今よりもっとたくさんの場所でホタルを見ることができたそうだ。これからホタルの数が減ってしまうとなると、普段から水をきれいに使うことを意識していない私は罪悪感を感じる。水を汚しているのは人間なのだから。水があるかないか、きれいか汚いかに人間やたくさんの生き物の命がかかっている。そう考えると、「水」という言葉に命の重みを感じる。世界中でもホタルが見られる国はとても少ない。ホタルを見ることができる私はとても自然に恵まれていると思う。私の中ではごく普通のことが、とても難しいことだと知った時はとても驚いた。

水をきれいにするだけで人間とたくさんの生き物や植物が同じ地球上で共存することができると思う。水は環境の保護にも大きくつながる。環境をきれいにすることによってできる景色はとても美しく、感動的でもある。それによって人々の笑顔が増えるのであれば、世界中の人々に水をきれいに使うことの大切さをもっとよく知って欲しい。そしてもっと水をきれいにしていって欲しい。

それを実現するには一人一人が水を大切にしようと意識しながら生活していく事が重要だと思う。工場の煙や自動車の排気ガスで汚れてしまった環境や、ゴミのポイ捨てで汚染されてしまった川の水も少しずつきれいにしていきたい。そして人々の心の中にある美しいホタルの景色を守り、まだホタルを見たことがない人達の心にもきれいなホタルの記憶を残していけたら世界中の人々の心が美しくなっていくと思う。

「水の惑星」と言われる、青く澄んだ地球。水資源の豊かな国もあれば、生きるための一滴を必死で求めている国もある。幸いにも日本は、水資源に恵まれた国だ。清流・せせらぎ、湧水など「水」にちなんだ言葉もたくさんある。豊かな風土がたくさんの言葉を生み出した。ホタルの住める「水」を守るということ、それは私達の故郷を守るということでもあり、豊かな心を育むということでもある。ここに生きる一人として、水の大切さ・ありがたさをいつも心の中に留めておきたいと思っている。

入選

「水」について私たちができる事

群馬県　群馬大学教育学部附属中学校
二年　飛知和　志帆

アルバムの中に思い出深い一枚の写真がある。一匹のキラキラと光る銀色のヤマメを両手で握っている小学生の私の写真だ。さっきまで水の中で泳いでいた魚は私の手から逃れようとジタバタと激しく動き、川の中へ戻すと、すーっと清流の中へ消えていった光景を今でもよく覚えている。当時この水上の渓流での釣りの体験を絵日記にしたところ、担任の先生から

「天然のヤマメが釣れるだなんて、群馬の水はそれだけきれいだという事ですね。」

最近祖母から、父が大学生の頃の話を聞く機会があった。地元の群馬を離れ、東京で一人暮らしを始めた父は東京の水道水になじめず、祖父母がよく飲み水代わりに…と、野菜ジュースやオレンジジュースを小包に入れて送っていたというのだ。父に確認してみると

「子どもの頃から飲み慣れた群馬の水に比べて、どうも薬品ぽい臭がするような気がしてなじめなかったんだよ。もちろん東京の水もきちんと検査されていて、飲み水として安全なものなのだから、好みの問題だったのだと思うけれど、群馬の水はおいしいんだと、その時に実感したよ。」

とのことだった。

私が毎日あたりまえに飲んでいる水。大学生の父がおいしいと実感した水。蛇口をひねれば簡単に飲むことができるこの水は、清流にしか生息できないというヤマメが住む谷川などから流れ出て、大きな川へと合流し、市街地へと流れ来る。大本の山や森の自然が豊かで美しくなければ、美しい川は生まれないし、おいしい水にはならない。毎朝通学で利根川を渡る時、北の空を仰ぎ見ると遥か遠くに谷川連邦が雪をいただいているのが見える。やがてあの雪は雪解け水となり、豊かで美しい山や森をぬけ、辺りの植物や生物を潤し、命を育みながらこの利根川へ注いでくると思うと、その壮大な旅路に尊敬の念がわいてくる。と同時に、私たちが豊かな自然を守り続けていかなければ、このおいしい水を飲み続けることはできないのだと、しっかりと心に留め置き、この水の恩恵を受ける者として行動に移していかなくてはと強く思う。

私たちはまた、先人達が干害から田畑を守る為にかつてこの前橋の地に天狗岩用水を築き、利根川から水をひいて田畑を潤し、豊かな恵みを受けたことや、洪水の被害から人々や土地を守る為に、板倉町には渡良瀬遊水池がつくられた事を郷土の歴史として学習してきた。時に水は脅威にもなりうる事があり、私たちの生活に被害をもたらす事もあるが、知恵と技術によって私たち人間は川を治め、水の恩恵を受けてきたのだ。そしてそれらの努力は過去のものではなく、形や方法を変えこれからも続けられていく事なのだ。私の家の近くを流れる滝川は数年前、新たに水門ができた。かつて滝川が氾濫し床下浸水を経験したことがある近所のお年寄りたちは

「これで安心だね。」

と話していた。こういった自然との共存の努力と工夫はこれからもずっと継続していくべき課題なのだと身近に感じた。

昨年の東日本大震災による福島の原子力発電所の事故の影響で、一時的にではあるが、東京都の一部の浄水場で乳児の摂取規準を超える放射線が検出された。店からは水が消え、都が乳児のいる家庭に飲料水を配布するニュースを見た時に、怖いと感じた。安全な水のありがたさを痛感した。

おいしい水を生み出す豊かな自然を守り続ける事、自然との共存の努力と工夫を継続する事、安全な水のありがたさを忘れない事が豊かな水の恩恵を受けている私たちにできることだと、今回「水」について考え、強く心に思った。

入選

メイドインさいたまの水

埼玉県　さいたま市立大宮南中学校
三年　尾﨑　正大

「練習、終わり。」の声とともに、陸上部の僕は水飲み場に走っていった。蛇口から出てくる水を思いっきり飲む。「ああ、おいしい。」と思わず叫んでしまう。自分の水筒にスポーツドリンクを入れて持っていくけれども、夏の暑いときにはそれだけでは足りないので、水道の水はとてもありがたい。

小学生の頃は、学校に水筒を持っていくことはなかったので、水道の水をよく飲んでいた。休み時間、サッカーをしてのどがカラカラになると、水飲み場にダッシュして、ゴクゴクと飲んでいた。ある時、どの水飲み場の水がおいしいのか、みんなで探してみることにした。いろんな蛇口の水を飲み比べてみて体育館の横の水飲み場が一番おいしいということになった。それからは、その蛇口の取り合いになった。母からは、「みんなで利き水大会をしているみたいね。」と言われた。

中学二年生のある日、小学校の時のように「利き水」をしてみることにした。プールの脇の水飲み場は少しカルキの臭いがして、いまひとつだった。武道場の水飲み場は室内にあるので、冷たいことが分かった。そして、とっておきの場所を見つけた。野球部のネット裏、ブルペン近くの水飲み場だ。日かげにあって、おいしい。ここは、みんなあまり気づいてないようだ。中学校生活の中でも、僕はお気に入りの水飲み場を発見できた。

僕が水道の水をすすんで飲むようになったのは、小さい頃から英語を習っているリチャード先生の話を聞いてからだ。先生はレッスンの時、いつも机の上にペットボトルを置いている。「ダイエットコーラ」と書いてあるのに、中味は透明。「それ、なあに？（What's this?）」と聞くと「パワードリンクさ。（Power drink）」と先生は答えた。僕がキョトンとしていると、笑いながら「これは、メイドインさいたまの水だよ。」と話してくれた。

リチャード先生の故郷のイギリスの水は石灰分が多くてそのままでは飲めないこと、沸かすと白いものがたまることを教えてくれた。そして、「さいたまの水はおいしいよ。どうして日本の人はわざわざペットボトルの水を買うのかな。モッタイナイね。」と不思議そうに話してくれた。

家に帰って、母にこの話をしたら、「相撲で『力水』、英語で言うと『パワーウォター』というものがあることを教えてあげればよかったのに。」といわれた。でも、僕の英語の力ではまだ無理だなと思った。

そして、インターネットで調べてみると、さいたま市では、災害時の備蓄水用としてアルミボトル缶「さいたまの水」を販売していることが分かった。浦和浄水場にある井戸の地下二六〇メートルからくみ上げた地下水を使っていて、五年間も保存できるそうだ。写真で見ると、缶には花のイラストが描いてあってキレイだし、リサイクルもできるのかなと思った。大地震のニュースもあるし、今度買ってみようと思う。

ゴールデンウィークを過ぎて、気温が高くなってきたので、熱中症にならないように水分をちゃんととらなければいけない。練習の合間に、お気に入りのブルペンの水飲み場にかけ込む。水を飲み、ついでに顔を洗う。気持ちいい。大宮南中の「鉄管ビール」（この言い方は、祖父が教えてくれた）、僕にとっての「力水」を飲んで、また、ひとっ走りだ。

入選

本当の答え

埼玉県　熊谷市立富士見中学校
三年　諏訪　史香

「なんだか、雨降りそうだね。」
教室の窓から空を眺める友達と私・・・。
家々の屋根を覆うように雨雲が低くたれこめている。それからまもなくポツリ、ポツリと雨が落ちてきて五分も経たないうちにシャワーのようにザーと降り出した。雨の雫がラムネのようにパラパラと地面をはじいている。
その時、幼い頃よくやった「なぞなぞ遊び」を思い出した。
「切っても切っても、切れないもの何だ？」
「水！」
あの頃は、当たり前に答えていた。でも、このなぞなぞには、もっと深い意味が隠されているように今は感じる。
そこで、答えの「水」について色々調べているうちに興味深いものを発見した。それは、地球という星も人間という生き物も七〇パーセントを占めるのは「水」であるというものだ。地球の表面は、ほぼ七〇パーセントの海と三〇パーセントの大地に分かれていて水は、地球上に気体・液体・固体という三つの形で存在しいつも循環している。一方、人の体の中の平均的な水分量をみると、これもまた七〇パーセントを占める。驚きである。
そして、もっと驚いたのは構造までよく似ている点だ。地球は、汚れた水を土というフィルターで浄化し、きれいな水を生み出す。一方、人の体の中で水は体内を巡り、途中、肝臓や腎臓がフィルターとなり、きれいな体液を作り出す。
つまり、両者ともこれらの「フィルター」がとても大切な役目を果たしているわけである。もし、体内のフィルターが故障してしまったら体調は崩れる。一方、土というフィルターが機能しなくなってしまったら、地球上の水は浄化されず、私達も生きて行けなくなるに違いない。どこからか「浄化器を使えばいいじゃないか。」という声が聞こえてきそうだが、地球上の七〇パーセントを占める水を全て人工的に浄化するのは、まず無理だろう。
では、何か良い方法はないものか。
それは、「自然保護と再生」だと思う。私の住む埼玉県の緑は、都市化によってどんどん失われ、最近三〇年でみても、平地林などの身近な緑は何と六千五百十四ヘクタールも失われている。この数値は、山手線の内側や浜名湖の面積とほぼ同じである。
そこで、埼玉県では、「緑と川の再生」にとても力を入れている。中でも「一人一本植樹運動」は、一人が一本、二人で二本、七二〇万人の県民みんなで七二〇万本という壮大なものだ。現在は、三〇〇万本を超えた。まだまだ長い道のりではあるが、一人一人の心がけで着実に緑は増えると思う。そして、光合成により空気もきれいになり樹の根が張り巡らされた土は、最高の浄化フィルターとなるだろう。すなわち、自然が作り出す超大型浄化システムの完成となるわけだ。これが実際に動き出し、緑と水と人間が一本のリング状のパイプで結ばれ、うまく循環出来れば、大成功といえるだろう。それには私達の努力がとにかく必要だ。
また「日本は昔から資源小国ではあるが、水と緑に恵まれ四季の変化もすばらしい、自然豊かな国」と、言われ続けてきた。私も、そんな日本が大好きだ。だから、これからは自然の声にもっと耳を傾け、自分で出来ることから少しずつ行動したいと思う。
こう色々考えてみると、あのなぞなぞの本当の答えが見えてきたような気がする。
「切っても切っても、切れないもの何だ？」
それは・・・。
「水と緑と私達の縁」では、ないだろうか。

入選

あたり前じゃない

千葉県　千葉明徳中学校
一年　大滝　遥香

夏の暑い日のミニバスはとてもつらい。でも、私には楽しみがある。みんなとプレーするのも楽しいが休けいの時風にあたり飲む水はとてもおいしい。何よりも汗をかいた後に浴びるシャワーは最高だ。

日本では、この水は蛇口をひねれば勢い良く流れ出す。私は、近所に浄水場があるので見学に行った事がある。そこにある水は、私が思っているようなすき通ったとう明なものでは無かった。私の前にはゴミの入った色も緑に近い水があった。私は最初「こんなの飲んで大丈夫なのだろうか」と思った。前に進んで行くと、とても大きな機械がたくさんあった。これは水をろかするための物だった。風車のような物、タイヤにトゲがついたような物など色々な物がたくさんあった。やはりきれいな水を作るためには色々な役割をする大きな機械が必要不可欠のようだ。どれ一つかけてはいけない物だそうだ。

けれど私はこう思った「一人一人がきちんと気をつけて水をきれいに使えばもう少し楽に水をきれいにできるのではないのか」と。私は、水をきれいに使うために必要なのは日常生活を少し変える事だと思う。例えば、料理で使ったお皿やなべはそのまま洗ってしまえば、ぎとぎとの油が水と一緒に流れてしまう。私はそんな事はしたくない。もう少しだけ工夫をしてみれば良いと思う。そのまま油を流すのではなくいらなくなった洋服や新聞などで油を一度ふいてから洗った方が良いと思う。そうしたらシンクもよごれないし、使う洗剤の量も減らす事ができるだろう。

違う視点から見てみれば節水という考え方もある。お風呂は、毎日入る物だ。みなさんはその水をどうしているのだろうか。もしもその水を捨ててしまっているのなら少し考え直してもらいたい。私は、お風呂の水も利用出来ると思う。それは洗濯だ。洗濯はどこの家でも必ずする物だ。だから私は、お風呂に使ったお水で洗濯をすればすごく良い節水になると思う。後もう一つ庭の手入れをする時用の水だ。花は水がないとかれてしまう。でも花がたくさんあるとその分水道代もかかってしまう。けれど、雨水を利用すればどうだろう。うまく溜める工夫をすれば節水にもなるし、災害の時にも役に立つと思う。

それからポスターで呼びかけるのも良いと思う。人が水をよく使っている場所にはったりするのも良いと思う。そうすれば少しは違うと思う。

昨年の震災の後、節電をすごく意識するようになった。電気の使用量が計れる機械を使って使った量を目で見る事ができた。そうすると不思議ともったいないと思ったり、使用量が減ると、とてもうれしくなったりした。もっと頑張ろうと思ったりもした。水も同じだと思う。今流したシャワーの量はペットボトル何本分です。とか歯みがきをする時に使った量はこの位ですと目で分かるようになったらいいと思う。

私達は水が無くなると言う事はなかなか想像はできないけれど、世界には水不足で困っている国がたくさんある。すぐ近くに国中国もその一つのようだ。前にテレビで、日本の水源を中国の人が買いに来ているというニュースを見た。日本だっていつ水が無くなってしまうか分からないと思ったらとってもこわくなった。水の無い生活なんて考えられない。私達の水は私達で守らなければいけないと思う。

まずは自分、そして家族・学校・地域とどんどん節水の輪を広げていこうと思う。

入選

「水」に感謝して生きる

東京都　港区立三田中学校
二年　小原　真樹

「美味しい」

私は、コップの水を一気に飲み干した。運動した後に飲む水は、最高に美味しい。冷たい水が体の中を流れていくと、疲れが吹き飛び元気になる。

水は不思議だ。人間にとって必要不可欠なものだが、量が違えば恐ろしいものへと変化してしまう。少なすぎても多すぎても、命を脅かす可能性を秘めている。例えば、水が不足すると、大地がやせ、農作物や草木が育たず食料不足となる。水がなくなってしまうと、人間は生きていけない。反対に、大雨が降り水量が増加すると、洪水や土砂崩れが起きる。河川の氾濫や地震後の津波では、人の命や財産が一瞬で危険にさらされてしまう。

五才の時、私は実際に洪水を体験したことがある。平成十六年十月、父の転勤で兵庫県豊岡市に住んでいた時のこと。台風の影響で大雨が降り、近くの円山川が氾濫してしまった。川から流れ出た水は、あっという間に広がり、市街地の大半が浸水した。見渡す限り茶色い水。道路はなくなり、水の上に家や車が浮かんでいるかのように見える悲惨な光景。父は長靴をはき、腰まで水に浸かりながら会社へ出勤した。残る私達家族は、水が引くまで自宅内で待機。水が引いた後、泥だらけの自宅周辺や車を掃除したが、車は動かなくなっていた。当時の様子は、今でもはっきりと目に焼きついている。晴れている日には全く考えられないことだが、水の恐ろしさを実感させられた出来事である。

水には恐ろしい一面があるとはいえ、私達が水の恩恵を受けていることを、決して忘れてはいけない。人間などの生き物や植物が生きていけるのは、間違いなく水のおかげなのだ。私達は毎日水を飲み、水を使用して生活している。朝起きて顔を洗い、夜眠りにつくまで、料理、洗濯、トイレ、風呂など、生活のあらゆる面で水が必要である。

日本では、水道の蛇口をひねりさえすれば水が出てくる。「もしも水がなくなったら」と考える機会はあまりない。しかし、世界中では水不足や水の問題が起きている。水の使用量の増加、地球温暖化による異常気象、新興国での汚水問題など。新聞やニュースでの報道を知るたび、私は悲しい気持ちになる。

水に関わる問題に対して、私達は何か出来ないのだろうか。水の循環という面で考えると、私達が使用した水は、川から海へと流れこむ。海水は水蒸気となり雲を作り、雨となり地面にしみこむ。川に戻った後、浄水場で安全な水となり、水道管を通して私達の元に帰ってくる。地球全体を巡り、壮大な旅をして、自ら使用した水が帰ってきてくれることを知ると、水のありがたみがよく分かる。私達は水を大切に扱わなければいけないのだ。

今、世界で起きている水不足や水汚染などの問題は、私達と全く無関係ではない。水循環の仕組みや効率のよい水の利用方法を理解して、地球環境に優しい暮らしや行動に取り組まなければならない。一人でも多くの人が節水を心がけ、水の利用を見直すことが必要となるだろう。私は、シャワーの時間を短くする、水を出しっぱなしにしない、蛇口をこまめに閉めるなど、身近なところから節水を心掛けている。また、水汚染に繋がる生活排水を出さないために、食器洗いの前には汚れを拭き、合成洗剤を使いすぎないようにしている。

私自身、大きなことは出来ないが、毎日の生活でこつこつと努力していきたい。そして、水の大切さを家族だけではなく、周囲の人々にも伝えていきたい。日々の努力が、水問題解決に向けての第一歩となるように願う。私達は、「水」と一生付き合うのだからこそ、「水」に感謝して生きていきたい。

入選

「水を通してみえたこと」

東京都　星美学園中学校
二年　小林　亜伽里

「日本は水の豊かな国ではないんですよ。」授業で先生の言った一言。私には、先生のことばの意味がよくわからなかった。日本はこんなに水で溢れているのになぜだろう。私は先生の“日本は水の豊かな国ではない”ということばに違和感を覚えた。そしてこれをきっかけに、今の生活での水の存在を、改めて考えてみることにした。

日頃、私達はどの位の水を使っているのか。人間が一日に必要とする最低限の水の量は、一人当たり約五十リットルとされる。一方、日本人は、一日に一人当たり約三百二十二リットルもの水を使っていると言われる。しかしここで見落とせないのは、私達は実際、もっと多くの水を、バーチャルウォーターとして使っているということだ。つまり日本人は、世界各国から穀物や畜産物を輸入すると同時に、それら食料をつくるのに他国で使われた大量の水を、間接的に利用させてもらっていると考えられるのだ。日本のバーチャルウォーターの輸入量は一年に約六百四十億トンで、これは東京都全域が三十メートル沈没してしまう程の膨大な量に相当する。

ところが、私達がこのように水に不自由なく生活を送る一方、世界人口の四十一パーセント、約二十五億人が、一日に五十リットル未満の水で生活している。さらにユニセフと世界保健機関によれば、世界の八人に一人は、汚染の恐れのある水を利用しているという。私は、海外での水事情をもっと詳しく知りたいと思い、カンボジアでボランティアをした経験のある先生に話を伺うことにした。

先生によれば、カンボジアでは、一つのカメ（それもボウフラがわいていて衛生的ではない）の水を五人家族で一週間使うそうだ。有害ガスが発生する危険なゴミ処理場で丸一日、お金になりそうなゴミを子供がやっと拾い集め、それを売って得たわずかなお金（約三ドル）と交換に、水を手に入れるのだという。また雨季と乾季に分かれているカンボジアでは、乾季には気温が三十九～四十度前後まで上昇し、水不足となる。そうすると人々は、水を求めて川の近くへ村ごと移動するそうだ。水のためだけに毎年引っ越すなど、日本では到底考えられない。私がとりわけ驚かされたのは、ゴミ処理や皿洗い、洗濯、歯磨き、洗髪はもちろんのこと、家畜の排泄物の処理、人間の排泄までもが一つの川で行われていることだ。カンボジアでは、衛生的な水を飲めないことが原因で感染症にかかり、死亡する乳幼児の割合が非常に高い。水で命を奪われる子供がいるという事実を知り、私はとても大きな衝撃を受けた。「世界には水に不自由している人もいる」ということを、頭の中だけで理解したつもりになっていた自分が恥ずかしくさえ思えた。世界には安全な水を飲めない国がある、むしろそうでない国の方が多い、それが現実なのだ。

日本では東日本大震災という大きな天災によって原子力発電所で事故が起こり、放射性物質が大気中に放出された。その影響で、東京でも乳幼児への水道水摂取が制限されたことがあった。安全な水を飲めない点で、この状況は、まさにカンボジアと同じだと思った。日本では幸い、再び安全に水道水が飲めるようになり、海外からも多くの水が輸入された。しかし世界には、安全な水が手に入らなければ輸入に頼ることのできる国ばかりではない。ボリビアの水の活動家、ソロンが述べるように、水には代替物がない。水を得られなければ、人は命を失うしかない。水は命の糧であり、何ものにも代えがたいものだ。それにも関わらず世界には、その糧を充分に得ることができず、今この瞬間にも命を落としている人が数多くいる。私達はその現実を真摯に受け止め、その上で、日本では安全な水を使うことができることを当然視せず、感謝して水を大切に使っていかなければならないのだ。

入選

ダムの底に眠るふるさと

神奈川県　山北町立三保中学校
三年　芳賀　夕佳

「あっ！家が流れてる。」

私の母は、五歳の時、大きな水害に遭遇しました。昭和四十七年七月十二日に起きた大水害です。この日の降水量は五百ミリを超えるものだそうです。刻々と激しさを増す雨で土砂崩れや家が流されるといった被害がありました。母が暮らしていた所は、山々に囲まれていたので土砂崩れで孤立してしまいました。母は隣家が流れているのを見て、とても怖かったと話してくれました。

水害の多い三保に災害防止のためにダムが造られることになりました。しかしダムを造るにあたっていくつかの問題が起こりました。それは、ダムを造ることに対しての反対意見です。三保に住む人々の中でダム建設に対して反対する人がいました。その理由として二つの意見がありました。一つ目は、「自分達の家がダム建設でなくなってしまうこと」そして二つ目は、「ダムを造ることによって人口が減ってしまうこと」でした。私もその場にいたら、きっと反対すると思います。実際にダムが造られて人口が減りました。そして私たちが通う三保中学校は、あと二年で山北中学校、清水中学校と統合されることになりました。人口が多ければ統合されることは、なかったと私は思います。

そんな反対意見もある中、水の確保と災害防止を優先し、ダムが完成しました。今、私の家の周りにあるダムには、昔そのような歴史があったこと、水害を体験した母の気持ちも、私は今まで知りませんでした。ダムを造ったことで良いこともあれば悪いこともありました。難しい選択だったのだと、私は思います。

ダムが完成してから何年も経ち、現在にいたっています。私は、ダムがあったほうが良いのか、無かったほうが良いのかは、わかりません。でも、たまにダムがなかったらもっと人がいて三保中学校がなくなってしまうことは、なかったのではないかと考えることもあります。しかし、現在にダムがあって助かったと思う出来事がありました。平成二十二年、昔に起こった大水害に近いくらいの大雨が降りました。川は荒れ、土砂崩れが起き、前と同じような状況になりました。でも、ダムがあったことで水害の影響も少なく、大きな被害はありませんでした。私は、ダムに助けてもらったように感じました。

三保ダムの水は、横浜と川崎等県民の飲み水として運ばれています。三保で流れている水が人の多い所で役に立っている、これは、すごいことだと思います。確かにダムができたことで三保の人口が減り、三保のにぎやかさは、前よりなくなってしまいました。でもダムができたことによってあの大雨から町を守ってくれました。やはりダムがあって良かったと思います。もしダムがなくなることになったらきっと私は、反対すると思います。それは、災害防止として町のために自分の家を犠牲にして、ダム建設に賛成してくれた人々の気持ちを台無しにしてしまうと思うからです。現に私の母も七歳の時にふるさとを離れました。友だちと離れなければならないことは、とてもつらかったそうです。

「ダムの底に沈んでいる母の家を見てみたいな。」と私は思いました。母の家が近くにあるのに見ることも、行くこともできません。私もさびしい気持ちになりました。でも、母はもっとさびしかったと思います。だからこそ、水を利用する人は、ダムを造るためにふるさとを離れた人々の思いを考え、水を大切に使ってほしいと思います。

入選

湯水のごとく

山梨県　山梨市立山梨北中学校
二年　小平　守都

「湯水のごとく・・・」という言葉通り、僕にとって水は惜しげもなくふんだんに使えるものだった。実際、僕の住む山梨ではミネラルウォーターの生産量が日本一という事もあり今まで水に困った事など一度もなかった。そのため、僕は水が貴重な資源だという事をいまひとつわかっていなかった。

でも僕のそんな甘い考えをあらためさせられる出来事が起こった。それが東日本大震災だ。配給のペットボトルの水を次の配給がいつになるかわからないからと少しずつ飲む人。お風呂も顔を洗うことさえもがまんしなくてはいけない現実。それは僕が今まで抱いていた水への考え方を根本的に考えさせられるものだった。

調べてみるとたかが水と言っても、多くの行程を経て各家庭に送られている事がわかった。つまり家庭での水はすべてが多くの人の手をかりて作られた資源だった。そして僕はその作られた資源を何の惜しげもなく、トイレの排水や洗濯に、まさしく湯水のごとく使っていた。

そう僕は作られた水のみで生活していた。目の前を流れる川の水、ポツポツと降る雨水、水とよべるものは沢山あるのに、僕の暮らしと直結しすぐ利用できる水は人の手で作られた水道水しかない事に僕は気がついた。もしかしたら僕の家の目の前の川の水ならば何か生活水として利用できるかもしれない。そう考え川の水を調べた。でも結果は僕の期待を見事に裏切るものだった。ろ紙についた小さなゴミ、顕微鏡を使った観察では多くの微生物が見つかり、そのまま生活水として利用する事は衛生的に難しかった。

元来、水は身近にあるものだった。祖父が子供の頃、水は井戸からくみ、見目の前の川で魚をとり、野菜を洗い水浴びをして遊んだりしたそうだ。でも今、その井戸はなくなり川の水で野菜などを洗う事はない。身近だったはずの水は汚れ、多くの人の手や薬剤を使わなくては使用できなくなってしまった。

僕達は生活するうえで沢山の水を消費している。そしてその水の多くが生産された精製水である。それだけではない、食糧や衣類等、多くの生活用品を輸入に頼る日本にとってまさしく海外の水を使って生活している事になる。その大切な資源である水を僕達は自らの手で汚し、無駄に使っているのだ。

「湯水のごとく・・・」

それは日本は自然豊かでまだ環境が守られていた頃の話だ。汚れてしまった水をきれいにするのはとても難しい。昨年の夏、自由研究でおこなった「家庭排水のろ過」の実験で、数滴の油、洗剤をろ過するのがどれだけ難しいのか、人間にとっては問題ないが他の生物にとっては問題がある事を僕は実験を通して思いしらされた。

今、僕は自分自身で出来る環境活動にとりくんでいる。例えば毎日の食器洗い、僕は食器洗剤と水をたくさん使わないようにする為、汚れをあらかじめヘラでこそぎ落としてから洗うようにし、お風呂の残り湯はトイレの排水に再利用している。

「湯水のごとく。」

かつて祖父が過ごしたような、枯れる事なく湧きでる安全できれいな井戸水、キラキラ輝く川の水、ポタポタと落ちてくる雨、水が身近に感じられるようになった時、「湯水のごとく。」の本当の意味が実感できるのではないだろうか？そしてそれこそが地球の本来の姿ではないだろうか。僕はこれからも自分で出来る活動をしていこうと思う。それが地球を守る事につながると信じて。

入選

当たり前ではない水

岐阜県　美濃市立昭和中学校
三年　三原　優歩

長良川。

きらきらと太陽を受けて輝く青い水が滔々と流れる。橋の上から覗き込むと川底の石の一つ一つまではっきりと、キラッと光る魚まで見える。鮎釣りの季節には、鮎の数より多いのではと思うほど多くの釣り人がならび、暑い日にはざぶんと飛び込む中学生の姿がある。そんな美しい活気ある川のあるところに私は住んでいる。

私は小学校の時に引っ越してきた。それまでは浄水器を使っていたのに使わなくなった。夏の渇水期はカルキの臭いが強く、飲むどころかシャワーを浴びるのもカルキ臭さが気になることさえあった。それが、浄水器を使わなくてもカルキの臭いがしない。何より、おいしい。甘いような気さえする。びっくりした。同じ水道から出てくる水なのに、こんなにも違う。長良川の伏流水を井戸を掘って水道水にしていると聞いて、長良川がきれいだからおいしいのだと感動したが、水道水のおいしさに慣れるのは早かった。いつのまにか、おいしい水、いつでもたっぷり出てくる水が当たり前になっていた。

東日本大震災。震災は、私にいろいろなことを気づかせた。水があるのは当たり前ではない。水はいつでも飲めるよう、いつでも使えるように誰かが作り、水道を引き、管理しているから使える。どこか一つでもだめになったら水は私のところには来ない。そんな当たり前のことに気づいたのは、バケツやペットボトル、様々なものをかかえ、給水車に並ぶ人々の映像を見た時だった。津波に流された水源地の井戸、地震で寸断された水道管。風邪が流行る中、手さえ十分に洗う事さえできない避難所の人々。胸が苦しくなってきた。自衛隊員が沸かしたお風呂に何日かぶりに、気持ちよさそうに入る人々。でも、そのお風呂に入ることなく、自衛隊員の人たちは着替えさえ持たず被災地に向かい、人のために働くのだと聞いた時には涙が出そうになった。いつでも温かいお風呂に入ることがどれだけ贅沢なものであるのか、きれいで美味しい水があるのがどんなにありがたいことなのか、今まで考えたことすらなかったことが恥ずかしくなった。

「もったいないでしょ。」

シャワーや洗顔の時の水の出しっぱなしを今まで何度も叱られた。返事はするものの心のどこかで思っていた。いっぱいあるからいいじゃないかと。でも、やっと分かった気がする。きれいで美味しくて安心して飲める。使える水はどこにでもあるものじゃなくて、誰かの手によって守られ、作られ、届けられているものだということが。そして、いっぱいあるものではないということが。

今、アフリカの角と呼ばれるソマリア、エチオピアなどの国々で過去六十年で最悪といわれる飢餓が発生しているときいた。その原因の一つにもなっているのが干ばつによる水不足、それによる農作物の不作。多くの難民が生まれ、多くの人々が食糧不足により死に直面している。水は世界的に枯渇しており、農産物を育てるために欠くことができない資源であり、世界は水を巡って争おうとしている。

私の甘えは許されるのだろうか。長良川の豊かな水に恵まれたところに住んでいるからこそ、私が水の不足を感じるようになった時にはもう遅いと思う。水が豊かなところに住んでいるからこそ、水を汚さないためには、水を大切にするためには何ができるのかを考え、行動を始めなければいけないと思う。私が出来る事は小さいからやらなくてよいのではなくて、小さくても続けることが大切なのだと思う。面倒くさいと思わずにこまめに水を止めることを、水へのありがたさを忘れない気持ちを持ち続けることで続けていきたい。

入選

水への心掛け

静岡県　湖西市立白須賀中学校
二年　小嶋　心

日本は蛇口をひねると水が出ます。これは日本で定められている水道法という法律により、水道が整備されているからです。

ぼくたちは、食事、飲用、洗顔、歯磨き、トイレ、入浴、洗たくなど日常のあらゆる面で水を使っています。ぼくは、それが普通の事だと思っていました。

小学生の頃、先生から、

「この世に生きているもの全てに水は大切。」と教わった事を思い出しました。それなのに、ぼくはその存在を当たり前のように感じ無尽であるかのように使ってきました。

しかし、あるテレビ番組を見た時、世界のさまざまな開発途上国では、水道が整備されているにもかかわらず、何週間も蛇口から水が出ない日があると知りました。その事実を知った時、ぼくはとても強い衝撃を受けました。いつも何気なく使っている水が、外国人からすればとても貴重なものだと知ったからです。

その日から、ぼくのささやかな節水活動が始まりました。お風呂での洗髪は、泡をよく落としてからシャワーを使う、歯磨きの時の水は、流水にしないでコップに水をためてすすぐなど、少しずつですがぼくなりに気が付いた事から始めていきました。

そんな様子を見ていた祖父が、ぼくに教えてくれました。祖父は長年、市の衛生課に勤務していて水の浄化に携わってきました。

「心よ。みそ汁を残してそのまま流し台に流すと、その何十倍ものきれいな水を汚染してしまう。例えばの話だが、水槽の中にみそ汁一杯を入れると、その中の魚は死んでしまうんだよ。」

と。

その後、その話がとても気になってパソコンのインターネットを使って水について調べてみました。そこには、『水は、雨が川に流れ、浄水場に引きこまれ水道へ。さらに使った水は下水道に流れ、水再生センターで処理され川や海へと返り循環している。』と書いてありました。循環しているという事は、できるだけきれいな水で海に返さなければいけない事が分かりました。

そしてさらに、祖父が教えてくれたみそ汁の話についても調べてみました。みそ汁一杯を下水に流すと、魚が住める水質に戻すためには、七六〇リットルもの水が必要になるそうです。資料によっては一四一〇リットルという説もありました。一四一〇リットルというと想像がつきにくいですが、人間が一日に使う水の量が二〇〇～三〇〇リットルなので、その五、六日分に当たります。みそ汁一杯を浄化するために、そんなに多くの水の量が必要な事にがく然としました。なんの気なしに残していたみそ汁が、そんな大変な事態を引き起こしていたなんて。

祖父がぼくに伝えたかったのは、水を使う量を節約するだけが節水ではなく、もっと根本的な事だったのだと思います。

好き嫌いを無くして、出されたものをきちんと食べる。こんな日常的な事も、節水や自然保護につながっているのです。

日常生活の中での小さな意識の積み重ねがやがては大きな力となり、節水や自然保護につながるのだと思います。

水は、地球に住む全ての人間が使います。動物にも植物にも必要です。つまり生きているもの全てに必要なのです。

そんな大切な水は、限りなくわき出してくる訳ではありません。水は循環している事を忘れず、水を粗末にした結果は必ず自分に返ってくると考え、大切に使うことを心掛けなければならないと思いました。

入選

「水は命の源」

愛知県　豊橋市立南部中学校
三年　仲川　凜香

みなさん、水って何色だかわかりますか？世界には水が無色透明で無味無臭と答えられる人はそんなに多くありません。

私たちが住む地球は水の惑星として他の惑星と違い水がふんだんにあります。特に日本人は水に恵まれた環境に暮らしているため、有難さを忘れています。だから水が有限資源だなんて思いもしない人が多いのです。なぜなら、蛇口をひねれば当然のように流れる無色透明で無味無臭の汚染のないきれいな水をいとも簡単に必要なだけ手に入れることができるからです。しかし今地球は人間が環境を破壊し温暖化を招き人が飲むことができる水が減少しているといいます。そのため二〇一五年には地球上の7億人の人が水不足により死亡するのではないかとクリントン国務長官が先日テレビで言っていましたし、水を求めて戦争が起きるかもしれないのです。二〇世紀は石油を巡って戦争が起きましたが、二一世紀は飲み水を巡って戦争が起きそうです。その証拠として近年外資が相次ぎ日本の水源を持つ森林買収に乗り出し、日本は外国から水を守ることができるのかと私は大変危惧しています。

昨年の夏、東三河の水がめと言われる鳳来湖（宇連ダム）に家族でドライブに出かけたことがありました。私はダムからみる湖は満々と水をたたえ、東三河の水がめと呼ばれるにふさわしい堂々とした鳳来湖を想像していました。しかし、私はダムから湖面を見下ろしたとき言葉を失ってしまいました。そこには湖面が満水時の半分以下に下がり、周りの山肌が露わになった鬼気迫る光景が広がっていたのです。「あと二週間も雨が降らなかったら大変なことになる。」そう思い、家に帰ったあと私は自分ができることとしてまず節水に取り組みました。歯磨き、風呂、トイレ、皿洗いには気をつけることはもちろん雨水の利用も重要です。各といの先にバケツを取り付け貯まった水を植木鉢に撒くようにしました。私一人が今更あせったってどうしようもないこととわかっていながら、水源の一大事を目の当たりにした私にとってそれをせずにはいられませんでした。もちろん家族にも協力してもらいました。しかし、また雨が降り鳳来湖が満水になったとたん今までの努力をしなくなるかもしれません。人間は愚かな生き物で、喉元過ぎれば熱さ忘れるのたとえ通り直面している困難には、それを乗り越えようとして努力を惜しみませんが、乗り越えたあとはその時の苦しさを忘れてしまいます。そして取り返しがつかない状態になってからでは遅いのです。

またしかるべき将来のため、今から継続的にしていかなければならないこととして、水資源確保のために緑のダムと呼ばれる森林保全をする活動（みどり募金）に積極的に参加するとともに、友だちにその重要性を伝えていき、その輪を広げていくことが重要です。

そしてもう一つ、企業努力として、工場排水などの水質汚濁を極力おさえ浄化してから排水することです。一度よごしてしまった水は元のきれいな水に戻るには長い時間がかかったり、自然の自浄作用ではどうにもならないこともあるからです。

私の学校には一人はみんなのために、みんなは一人のためにという素晴らしい校訓があります。一人一人の力は小さいかもしれませんが、みんなで困難に立ち向かい、先祖から引き継いだ生命にとって必要不可欠で大事な宝である水を後世にきれいなままバトンタッチすることが、私たちの使命であり当然の義務だと思います。

口先だけで水の重要性を説いても行動を伴わないと意義がありません。行動を伴っていてもそれが継続されなければなりません。水は命の源。そしてそれを守ってゆくということは一人一人が協力してたゆまぬ努力の積み重ねによってのみ成るのです。

入選

「水の伝統を次の世代に」

三重県　セントヨゼフ女子学園中学校
二年　赤塚　叶実

私達日本人にとって「水」はどんな存在なのだろう。日本の国技である相撲では、「水入り」や「力水をつける」という言葉が使われるそうだ。一方、「水が合わない」、「水心あれば魚心あり」など「水」を用いた慣用句も多い。

こうしたことから考えられるのは、日本人と水との関係の強さや深さであり、私達の生活や生き方を支えてきた、水の偉大さが浮かび上がってくる。

昨年の東日本大震災直後、スーパーマーケットやコンビニからペットボトルが消えたという現象は被災地とその近郊にとどまらなかったようで、改めて水の重要性が感じられた。震災後の様子を伝える報道でも、電気の通じない真っ暗な暗闇の中で、飲み水や洗顔、入浴用の水などがすべてストップした状況での肉体的、精神的な苦痛と不安な映像が何度も繰り返し流れていた。このことからも「水」は人間を含む生き物にとってどんなに大切な存在であるかがわかる。

父は時々お酒を飲むことがあって、外国に比べて日本にお酒の文化が発展し、定着したのは「おいしい水」があるからだろうという話をしてくれた。有名な「灘のお酒」も、神戸の北に六甲山があり、そこからのおいしい水が、酒造りを背負っているのだろう。水の源泉をたどれば山にたどり着くし、その山に水をもたらしたのは天の恵みの雨であり、その雨の源は雲である――と考えていくと、地球規模の話になる。

このようにお酒の文化は「水」によっておいしさが決まり、「人・水・酒」が一本の糸で結ばれていく。今、中学二年生の私にとってのお酒は「匂いが臭い。」と感じるだけで、その味を楽しむという父の気持ちは全くわからないが、水でお酒のおいしさが決まるという父の意見はなるほどと思う。

私が普段感じる「水」も季節によって印象が違う。春は「水ぬるむ季節」という言葉があるように、何となくあたたかみが伝わってくる。そして長い冬の間にずっと耐えていた我が家の木々や草花も、春の水の力で生き返り、ぐんぐん成長して花や実をつけて家族を楽しませてくれる。

夏の木々への散水や打ち水は、一瞬、夏の暑さをやわらげ、夕涼みの心地よさをもたらす。

秋の季節は、月と紅葉に押されて、水の存在は少し薄れた感じがする。野分という言葉と共に思い出される台風は水という言葉をはるかに越えて災害をもたらす洪水という重いイメージがつきまとう。秋と水はこのように相性が悪く、四季の中で秋が一番水のことを忘れさせる季節ではないだろうか。

冬の季節と水は私の中でどのように結びついているだろうか。

私は年長の時にスキーを始め、毎年家族で四～五回はスキーで出かけている。スキー場で水は最も警戒するもので、水は雪どけにつながり、スキーヤーにとって「水」は禁物とされている。

「雪のむら消え」という美しい言葉があると母が話してくれたが、スキーの大好きな私には、この言葉も心に響いてこないし、冬の季節に「水」の存在が確かな形では伝わってこない。

このように考えてみると、私と水の関係は私の主観的な感情が水の存在感を左右していることに気付いた。私が高校生になり、大学生になり、社会人として巣立っていく過程のなかで伝統的な水の文化に触れていくかもしれない。

そして長い歴史を背負ってきた水を、私の中に受け入れて、次の時代へつなぐ役割を果たす自分を夢見ながら「水」というかけがえのない自然と親しんでいきたいと思う。